



講堂で挨拶する上山先生（昭和62年）



特別展覧会「仁和寺の名宝」開会式（右端手前が上山先生、昭和63年）

上山春平先生を偲ぶ

上山春平先生が昨年、平成二十四年八月三日に逝去された。御年九十一歳であった。先生が林屋辰三郎館長の後を継いで、館長となられたのは昭和六十年（一九八五）四月一日のことであった。平成九年に編纂された『京都国立博物館百年史』には、

昭和六十年四月、調査研究事業の充実を図り、文化財保存修理所を実現し、これらを統合した組織として発足した京都文化資料研究センターの基礎を固めた林屋にかわって、哲学者の上山春平が第五代館長に就任した。新聞のインタビューに「適役じゃありませんよ」「二年間はいろんなことをジッと見せていたんだき、二年目ごろからポチポチ、ボクの考えを出していききたい」と答えながら、「林屋さん時代に『学叢』の刊行など研究面にウェイトが置かれたのはすごい。社会教育の面も大事と思うが、これは今後の博物館の一つの道標になるでしょうね」と述べて、研究の充実を基本的な抱負として持っていた。そしてそれは「大学院のような研究機関」を目指すものでもあった。（二二七頁）と就任直後の様子が述べられている。しかし、それから一年も経たぬ昭和六十一年一月二十二日に思いもかけぬ事件が起こった。当日

赤尾 栄 慶

の『朝日新聞』（大阪本社版）第一面トップに「京都国立博物館所蔵 敦煌古写経多数が偽物」という見出しの記事がおどった。これは、その前年の三月に発行された『学叢』七号に収録されている「『徳化李氏凡将閣珍藏』印について」という藤枝晃京都大学名誉教授の論文を承けてのことであった。その内容は、当館所蔵の敦煌写本に捺されている李盛鐸の所蔵印である「徳化李氏凡将閣珍藏」印が偽印であり、なおかつ、その印が捺されているそれらの敦煌写本も偽写本であるというものであった。この記事の末尾には、上山館長の談話も掲載された。その談話は、

当館所蔵の敦煌写本に関する藤枝氏の見解は、林屋辰三郎前館長がこれから学界での検討材料にするために学術論文として書いてもらった、と聞いている。藤枝氏は文化財保護審議会の専門委員でもあるわけで、指定文化財の中に偽物が含まれているとすれば、本来、文化庁のしかるべきところで問題にすべきことだ。こういうかたちで社会的に問題にされることに、館としては非常に当惑している。公的な場できちんと論議された上でなければ、館としては対応のしようがない。

というものであった。当時、私は、館員となって一年ちょっと、右も左もわからぬ頃であった。しばらくは大騒ぎとなったが、騒ぎが落ち着いた頃に上山館長が私に「時間がかかるだろうが、藤枝先生の見解を検証して欲しい」との言葉をいただいた。それから三年後の平成元年（一九八九）に私が文部省の在外研究員として六ヶ月半にわたる「敦煌写本に関する調査研究」に出発する前に、上山館長に挨拶をした際「藤枝先生の名人芸の鑑定ではなく、具体的な数値などのデータで写本の真偽がわからないか、しっかり調べてくるように」とおっしゃった。これが、現在の私の敦煌写本研究のきっかけとなったのであるが、その後もお会いする度に「最近はどう？」と調査研究の進捗状況をお尋ねいただいた。

これも昭和六十一年のこと。この年の五月二十日から七月六日まで開催された、特別展覧会「比叡山と天台の美術展」の関連土曜講座として、元大谷大学教授の白土わか先生を講師にお迎えした日のことであった。白土先生と上山館長の奥様が知己の関係であったこともあり、土曜日にもかかわらず、館長がお出まし下さった。まず、お昼を一緒にとることにになり、三人で近所のうどん屋さんに出かけたが、食事の話は、最澄のことはもちろん、師がなくて独自にさとりを開く辟支仏（縁覚）のことや日本仏教における戒律のことだったと記憶している。因みに白土先生の講座題目は、「天台の典籍」というものであったが、館長も講堂にお見えになり、講座が終わった後に館長室で懇談した折、こんな地味な題目なのに大勢の方が聴講にみえたことを「いや、本当によかった」と喜んでいただいていた。

上山館長らしいエピソードといえば、休館日の昼休みはテニスの

壁打ちをし、年に一度行われた親睦会主催のソフトボール大会にも参加し、打席にも入られた。また、陽気のよい時期の昼休みには、中庭の丸池周辺で小さな椅子に座って画帳を持って写生され、その作品が、順次、館長室に飾られていた。

館長の研究テーマの一つである空海については、昭和六十二年三月発行の『学叢』第九号に「空海と最澄の文通―両法師尺牘の背景―」という論文を寄稿いただいた。その論文は、

はじめに

- 一 最澄か圓澄か（一） 福井論文の検討
- 二 最澄か圓澄か（二） 赤松論文の検討

三 和尚と法師

四 弘仁四年か七年か

五 激突の記録（一） 泰範への帰山要請をめぐる書簡

六 久隔帖と中寿感興詩

七 激突の記録（二） 理趣釈経の借用要請をめぐる書簡

むすびに

という構成で、「為泰範答叡山澄和尚啓書一首（泰範、叡山の澄和尚に答するが為の啓書一首）」と「答叡山澄法師求理趣釈経書一首（叡山の澄法師、理趣釈経を求むるに答する書一首）」という空海の二通の手紙をめぐるものであった。詳細は省かせていただくが、「答叡山澄法師求理趣釈経書一首」については福井康順論文および赤松俊秀論文の主張を退け、宛所が圓澄ではなく、最澄に宛てたものである。また「和尚」と「法師」という呼称についても、空海在世の平安時代前期には、同一人物について「和尚」と「法師」が併用さ

れている具体例を示して、「和尚」が敬称であり、「法師」がやや見下げた呼称ではないことを論証された。空海と最澄をめぐる論考であり、読むにつれて引き込まれるような書きぶり、実に力の入った内容の論文であった（この論文は、『空海と最澄』上山春平著作集 第八巻 法蔵館 一九九五年 に採録）。この論文の執筆に関して、私が上山館長のお伴をして奈良国立博物館にお邪魔し、施福寺所蔵の「消息 伝空海筆」を見せていただいたことを思い出す。

その後、平成十五年（二〇〇三）春に開催した特別展覧会「弘法大師入唐一二〇〇年記念 空海と高野山」では、上山先生にぜひ空海のお話をしていただきたいと思い、電話でお願いをした。電話では体調が万全でない、万が一、当日体調が悪く外出できないようなら、私と泉武夫資料管理室長（当時）が代講をするという条件でお引き受けいただいた。講座の日は五月十日、題目は「空海と日本文化」ということになったが、さすがに講座の二、三日前には、「先生、大丈夫かな」と少し心配になったが、それは杞憂に終わった。当日、通用門でお迎えし、先生がタクシーから降りられるのを見た時には、ほっと胸をなで下ろした次第である。司会は、下坂守学芸課長（当時）が担当し、先生には椅子に座ってお話しをしていただけるように準備をした。静かな口調で比較的ゆつくりと約八十分の話であったが、印象に残ったのは「空海」の名についてのことであった。「そら」と「うみ」と考えるのが普通であるが、「空」は仏教でいう「空」、すなわち、あらゆる事物は縁起によって成り立っており、固定的な実体がないという根本真理の「空」とも考えられないかということであった。その鍵は『三教指帰』にある「生死海の賦」であり、どろどろした欲望と迷いの世界である「生死海」に対するウ

ラの世界である「空」が「空海」という名乗りなのではないかという示唆に富むお話が印象に残っている。

六年間の任期を満了して退職されたのが、平成三年（一九九二）三月三十一日であった。退任にあたってのコメントについて、再び『京都国立博物館百年史』を引くと、

退任した上山のインタビュー記事には、記者の「研究者や博物館関係者から『京博パワー』に圧倒されると半ば冷やかされているようですが」との質問がある。当時、京都国立博物館の活動がこの「京博パワー」という表現を生むほどにパワフルであったことを示しているが、そのことについて上山は、「わたしは率直にほめ言葉と思つて喜んでいます。伝統ある展示業務はもちろんですが、研究機関としての力をつけてきたことが、京博パワーといわれるゆえんだと思いますから」と述べている。その具体的な事業として研究紀要『学叢』の定期的刊行と社寺調査を挙げ、社寺調査に基づいて実施された「仁和寺名宝展」を思い出深い展覧会の第一に挙げるのである。（二二九頁）

この中の「仁和寺名宝展」は、その前年の社寺調査を承けて、昭和六十三年の春に実施した特別展覧会であったが、この時に出陳された「薬師如来坐像 円勢、長円作」（仁和寺所蔵）は、仁和寺北院伝来の秘仏であった小さな檀像で、当時は未指定の文化財であったものが、現在は国宝に指定されている。

これまで、いくつか出た追悼文には、館長時代のことほとんど語られていないので、少しその様子を書かせていただいた。上山館長時代の「京博パワー」は、現在も持続しているのかと自問し、学恩に感謝しながら、筆を擱くことにしたい。